

たんの小史
ふるさとと端野

16

先達の方々

屯田地区以外の地区(その2)

協和地区

野付牛村時代の協和地区は、川向と同じ野付牛第六部に属していました。大正一〇年四月、野付牛町から分村し「端野川向第二部」となり、昭和十三年一月から字名改正により「協和」となりました。

この協和地区に初めて開拓の鋤が入れたのは、明治三七(一九〇四)年、富山県氷見郡十二町から、常呂川河畔(現在の中央橋右岸下流附近)に入地した西川貞次郎氏です。入地当初は主に薄荷を耕作していましたが、毎年のように常呂川が氾濫し大きな被害を受けるため、大正二二(一九二三)年二区に転出しました。

また、翌三八(一九〇五)年に清野新太郎氏がチャシポコマナイ川の東一四号付近に入地、同四三(一九一〇)年、今村与一氏が協和神社付近に、同四四(一九一一)年に中林長太郎氏が先に入地していた西川貞次郎氏を頼り、常呂川河畔に入地しまし

た。

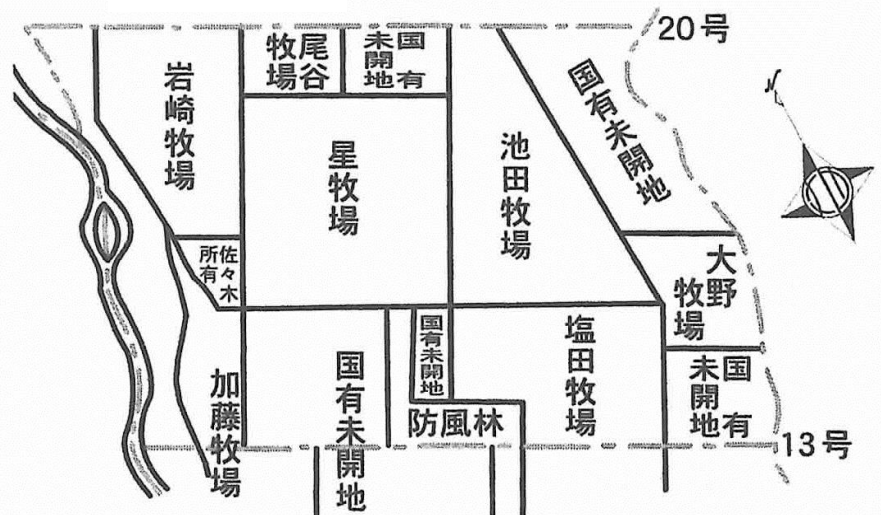
屯田兵や牧場等で活躍された方々は何らかの支援や基盤を持っていましたが、これらの方々は、全くの裸一貫で未開の地の開拓に挑んだ草分け、先駆の方々です。

また、協和地区も川向地区と同じように牧場経営にあたった方々が、開拓と地区の発展に大きな役割を担いました。

明治三九(一九〇六)年に岩崎牧場、加藤牧場、塩田牧場、翌四〇(一九〇七)年に池田牧場、高橋牧場、大正三二(一九一四)年に尾谷牧場、同六(一九一七)年に大野牧場が開設されました。(協和地区牧場概略図別記の通り) 牧場の経営や管理にあたられた方々、そして牧場の開拓の小作として入地され、民有未墾地の解放や自作農創設制度等により譲渡を受け、自立、自営の農家として、今日の協和の礎を築かれました。これらの方々も先駆の方々です。



協和地区 牧場概略図



忠志地区

安政四(一八五八)年、松浦武四郎の「午登古呂日誌」に、「：トコロ川口から二五、六丁遡上したところにチユウシがある。．．本名はチシユエウシで、チシユエウシは草の名で、ここにアイヌ人家五軒あった。．．」と記されており、これが現在の忠志(旧忠志小学校附近)です。(裏面に続きます。)

チウウシは、明治一六（一八八三）年九月、常呂郡に常呂外六ヶ村戸長役場が常呂港に設置されましたが、この六村の一つでチウウシを漢字にあて「小牛村」となり、常呂郡外六ヶ村戸長役場の管轄にありま

た。
 明治三〇（一八九七）年六月、野付牛に屯田兵が入地し、これにより野付牛村外一ヶ村戸長役場が野付牛に設置され、この時に少牛村は野付牛村の管轄になりました。さらに、大正四（一九一四）年、少牛村と手師学村のニコロ川流域（現在の仁頃、豊実、北登）の住民から常呂・野付牛境界変更の住民運動が起き、翌五（一九一五）年四月、少牛村の一部と手師学村のニコロ川流域の地域は野付牛に編入されました。同時に野付牛は町に昇格しました。

大正十（一九二一）年、端野村が野付牛町から分村し、「端野村少牛部」となり、昭和十三（一九三八）年字名改正により「忠志」となりました。

この地に開拓の鍬が入られたのは、明治四四（一九一一）年二月、現在の川口橋付近に入地した稲葉源之助氏です（野付牛屯田第二中隊三区戸主稲葉城助氏の弟）。また、同年春に、愛媛県新居浜郡中萩村を中心とした人たちが集団（愛媛団体）で忠志地区（別図の通り）に入植し、未開の荒野の開拓に挑みました。

この団体は、団体長の守谷健吉氏のほか松本鶴吉、守谷初太郎、守谷棟太郎、矢野吉次、西原福松、野々下柳三郎、白幡音吉、守谷友吉、松本九八、野々下綾太郎、野々下円太郎、野口伝蔵、小関弥三郎の各氏です。

なお、端野町における団体による拓殖は、この愛媛団体のみです。

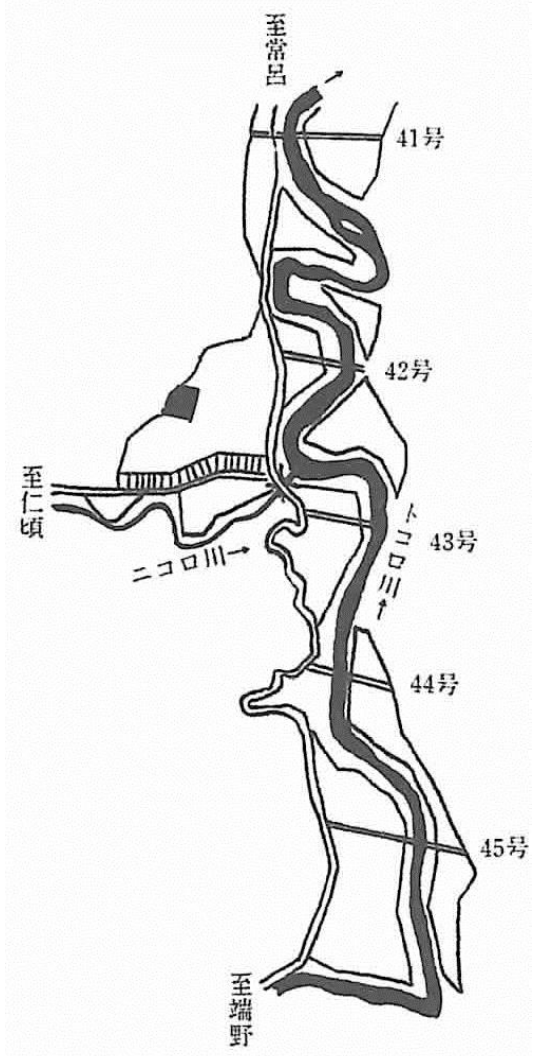
さらに、同年、緋牛内駅通の牧場が忠志地区にありましたが、この牧場の管理及び小作として入地された吉田丑之助氏で、後継者の方は吉田京右氏で今も同地で農業経営されております。

これら先達の方々のご苦勞が礎となり、今日の忠志があります。
 なお、近年の人口減少のなか、平成一九（二〇〇七）年四月、隣接の一区自治連合会と統合しました。

田中 誠

参考文献

- 端野町史（昭和四〇年発行）端野の夜明け（第三集）（平成元年発行）端野町のアイヌ語地名（平成元年発行）端野町の和地名（平成四年発行）協和部落史（入地五十周年記念、昭和三十年発行）協和史（協和部落七十年の歩み、昭和五十年発行）協和史（協和開基百年記念、平成十七年発行）



殖民地区画図

下常呂原野（少牛）